NPO法人河北潟湖沼研究所通信

かほくがた

豊かな河北潟に
夢のある干拓地に

CONTENTS

七豊米・７回目の田植え 1p

河北潟の仲間たち・49
「オオコオイムシ」 2p

プロボノの支援を受けて 3p

いすみ市視察報告 4p

大野川に残る逆水門 6p

新しいコミュニティ
はじめての田んぼ作業 7p

お知らせ・活動報告 8p

Vol.24-2
2019年3月31日

七豊米 7回目の田植え

農薬不使用、協働でつくっている七豊米田んぼで5月27日（日）、7回目の田植えをしました。今年もボランティアの方や体験参加の親子の皆様等といっしょに手作業での田植えです。まず田んぼの中に作った苗代から苗をとり、「田ころがし」で田んぼに印をつけて、とった苗を手で植えました。小さな子どもたちも皆とても丁寧に苗を植えていってくれ、例年以上にきれいに田植えができました。お昼には昨年同じ田んぼで収穫したお米のおにぎりと、すずめ野菜のお漬物もみんなでいただきました。ご参加いただいた皆様からは泥がきもちよかった、ふだんとちがう体験ができて楽しかったといったご感想をいただきました。昨年も体験会に参加された方からは、「子どもが昨年できなかった田ころがしを体験できて喜んでいた」「子どもたちが成長した分、今年はたくさん植えられた」とお子様の成長を喜ぶ声もありました。子どもたちが成長していく姿は、こちらとしてもとても嬉しいものです。＊今年の田植え体験イベントはキヤノンマーケティングジャパン「未来につなぐふるさと基金」からのご支援を受けて実施しました。（文：番匠尚子）

第49回　オオコオイムシ

オオコオイムシは、水生カメムシ類と呼ばれる水の中にいるカメムシの仲間です。親戚にはタガメがいます。タガメと違う点として、コオイムシの仲間は、メスがオスの背中に卵を産み付ける習性があることが挙げられます。名前（子負虫）の由来もその習性によるものです。よく間違えられますが、卵を背負っているのはオスです。幼虫が孵化するまで数週間、オスが卵を守ります。コオイムシ類の成虫には翅がありますので、飛翔して移動することができますが、子育て中のオスは、卵を背負っているので飛ぶことができません。一方、メスは飛んで他のオスを探しに行くことができます。

コオイムシの仲間には、本土にすむオオコオイムシとコオイムシのほか、沖縄にすむタイワンコオイムシがいます。コオイムシは日本本土の他、中国や朝鮮半島にも生息しています。オオコオイムシは北海道、本州に生息しています。河北潟にいるのはオオコオイムシです。

オオコオイムシの生息場所としては、田んぼの水路やため池などの小さな止水域（水の流れがない水辺）がイメージされますが、河北潟では湖岸の植生がある場所からも見つけることができます。図鑑には、オオコオイムシの生息環境としては、丘陵から山地の水深の浅い湧水を伴う湿地、コオイムシの生息環境としては、平地～丘陵地の抽水植物の豊かなある程度の大きさの池沼などと書かれており、河北潟は、オオコオイムシよりコオイムシが好む環境のように思われます。河北潟はオオコオイムシの生息地としては、ちょっと変わっているかも知れません。

餌としては、いろいろなものを食べるようですが、サカマキガイやモノアラガイなどの小型の巻貝よく食べるといわれています。カメムシの仲間なので、口は中空の針状になっていて、そこから消化液を出し、溶けた肉を吸い取って食べます。トンボのヤゴやメダカなどの魚も捕らえるようで、名前に似つかわしくないけっこう獰猛な昆虫のようです。

石川県ではコオイムシは絶滅危惧Ⅱ類の扱いになっており、いしかわレッドデーターブック動物編2009によると、能登の2箇所からしか確認されていません。オオコオイムシは、今のところはまだ石川県の絶滅危惧種には指定されていませんが、となりの富山県では、準絶滅危惧種に指定されており、石川県でも減少している可能性があるので、オオコオイムシも大切に守りたい河北潟の仲間です。（文：高橋　久）

プロボノの支援を受けて

皆さんは「プロボノ」という言葉をご存じですか？

「プロボノ」とは、「公共善のために」を意味するラテン語「Pro Bono Publico」を語源とする言葉で、【社会的・公共的な目的のために、職業上のスキルや専門的知識を生かしたボランティア活動】を意味するものです。近年、日本国内でもプロボノに対する社会的関心は急速に高まりを見せており、新しい社会貢献のあり方として注目を集めています。（以上、認定NPO法人サービスグラントHPより）

聞き取り調査の様子

私たちは、認定NPO法人サービスグラントが実施した2018年度の「ふるさとプロボノ」の助成をいただき、地域環境を良くしながら農家・消費者・NPO・野生生物のwin-winを目指す「生きもの元気米」のマーケティング調査を実施するとともに、NPOの基盤強化のための新たな自主事業の展開について支援をいただきました。

サービスグラントは、ビジネススキルや専門知識を活かして、社会的課題解決に取り組む非営利組織（NPO・地域活動団体等）の基盤強化を支援する「プロジェクト型助成」を行っており、お金ではなく、スキルや専門性によって非営利セクターを支援しています。プロジェクトマネジメント、調査、マーケティング、デザイン、ウェブ制作等のプロフェッショナルスキルを持った社会人が「プロボノワーカー」として登録し、支援を求めるNPOとの仲介をサービスグラントが行い、「プロボノワーカー」によるチームが、NPOの支援に当たります。加えて、今回はこうした「プロボノワーカー」の派遣を支援する仕組みとして企業の協賛を受け実施されるしくみです。

私たちには、以前よりお世話になっているパナソニック株式会社と関連会社の社員の方々6名により「パナソニック チーム元気米」を結成いただき、自主事業の強化を目標に、7月～11月までに、2回の訪問を含めて、河北潟湖沼研究所の生きもの元気米の取り組みの状況把握、消費者調査、結果取りまとめの作業と、最終的なプロジェクト報告書を作成いただきました。

最終報告では、消費者調査により、首都圏など大規模消費地では、「積極的なプロモーションを推進し購買者にリーチできれば販売拡大の機会は多い」と考えられること、「環境側面の取り組みが購入動機に直接紐づいていない傾向が見受けられる、健康面の情報発信などお米を中心にしたプロモーションが求められる」ことなどが抽出されました。また、個人向け販売のための10の提案と、新しい商品展開としての1つの提案をいただきました。消費者へのアンケートとしては、181名を対象にした調査をしていただき、回答の詳細を含めて、今後の展開に参考となる資料をご提供いただきました。（文：高橋　久）

最終報告会の様子

いすみ市視察報告

「第5回生物の多様性を育む農業国際会議（ICEBA)2018」　千葉県いすみ市にて開催される

子どもたちが毎日食べる学校給食、この給食に出されるご飯が、すべて地元で作られた無農薬・無化学肥料の有機米100％になっているところがあります。千葉県いすみ市、東京から特急電車で一時間と少し、房総半島の南東部に位置する市です。過疎に悩むいすみ市では、環境重視の政策で経済活性化を目指し、さまざまな取り組みをされています。取り組みの中心は、昔から地域の主な産業である農業や漁業。市をあげて生物多様性を保全し、環境になるべく負荷をかけない生産方法を模索しながら、農家や漁師が無理なく継続して生産していけるよう、生産品のブランド化も推進しています。地域の豊かな自然環境、水田の風景を次世代の子どもたちに残し、地域産業の活性化を目指す、研究所の取り組みが目指す方向と同じ方向を目指した取り組みで、これからの活動展開にあたり、とても参考になると思われる場所です。

7月21日、この地で「第5回生物の多様性を育む農業国際会議（ICEBA)2018」が開催され、それに合わせていすみ市へ視察に行ってきました。会議では日本をはじめ、ブータンやフィリピン、韓国等各国からの取り組みが紹介された後、テーマ別に分科会が行われました。分科会Ⅰ「農業技術分野において生物多様性の主流化をめざす」では、各地でどのように無農薬で栽培されているか、田んぼでどのような体験活動が行われているか等の話を聞くことができました。「コウノトリ育むお米」で有名な兵庫県の方からは、水田の強害草であるコナギを以前は手で取っていたが、現在は冬季湛水で柔らかい土の層「トロトロ層」を作り、コナギの種が層の下に行くようにして発生を抑えていること、夏にはカエルの変態を確認してから中干しに入っていること、もし無農薬で抑草に失敗した田んぼが出た場合の対処方法として、除草剤を1回使用することを認めていること等のお話がありました。いすみ市の農家さんからは、無農薬栽培では除草の問題を解決しなければ続けらず、抑草ができてようやく先が見通せるようになったこと、無農薬にしてもカメムシ被害は発生しなかったこと、無農薬栽培の米が学校給食に使われ、直接的に農業で地域貢献ができるようになり、農家に誇りが生まれたこと等のお話がありました。分科会Ⅲ「地場産有機農産物の学校給食をどう実現するか」では、いすみ市より、学校給食に有機米が使われることとなった経緯について、「安心安全のおいしいお米をまずは子どもたちに食べさせたい。」という地元農家の思いからはじまったことが伝えられました。また長年、学校給食に地元産の食材や有機農産物を使うことをすすめてきた愛媛県今治市、新潟県三条市、島根県吉賀町より、学校給食の食材のこだわりや食育の取り組みについてのお話がありました。今治市では生産者の情報が給食を食べる子供にまで届くことにより、「今日は○○さんの人参だ。」などと子供たちが当てっこをしているそうです。健康や味覚の発達につながるだけでなく、食材や食べものがつくられる環境にまで、子どもたちの関心を高めることとなり、子供たちが毎日食べる学校給食だからこそ安心の食材を使うこと、食育の場として重要であることが伝えられました。学校給食に有機米を使うこととなったいすみ市には、都市部の自治体などからも問い合わせがきているそうです。またそうした情報を得て他県から引っ越してくる家族もみられるそうです。いすみ市の取り組みとその波及効果が今後も注目されます。

会議の翌日7月22日には、実際にいすみ市で有機農業に取り組まれている農家・伊大知衛さんに田んぼを案内いただきながら、お話を伺いました。9.6haで水稲を栽培されている伊大知さんは、そのうち1.9haを有機栽培されています。案内いただいた伊大知さんの田んぼは田植え後、一切田んぼに入っていないそうですが、目立つ雑草は見られませんでした。

農薬を使わない場合、「抑草」が最大の課題ですが、いすみ市では、民間稲作研究所の稲葉光國さんを講師に農家向けの研修会が実施され、雑草を抑える具体的な技術について学びながら、いすみ市の気候や田んぼにあったやり方を探り、農薬不使用の栽培をすすめています。

伊大知さんによると、同じようなやり方をしていても雑草を抑えられる田んぼと抑えられない田んぼがあり、それぞれの田んぼにあったやり方を探すことが大事だそうです。伊大知さんからは、田んぼの土質がどのようなものであるか検査を一度してみること、田んぼはとにかく平らに整地すること、稲刈り後にすぐトラクターを入れ、田んぼ内に草が増えている状態を作らないようにすること等、実践されていることを基にアドバイスをいただきました。

いすみ市では、昔は食べ残しが多く出ていた給食も、地元産のおいしいお米がだされる今では足りないくらいだそうです。そして地元の子どもたちに食べてもらえることは、農家さんにとっても大きな励みとなっており、食べている子どもたち、作っている農家さん、田んぼの生きもの、みんなの喜びが増える取り組みを目の当たりにし、生きもの元気米の取り組みを地域に広げていくためのヒントを得ることができました。そして河北潟地域の土壌、気候に合った「草を抑える技術」を確立させることも、活動をすすめていくうえで非常に大事なことであると実感した視察でした。

新川橋と逆水門跡（2008年6月撮影）

海水が流れ込んでいたころの河北潟①

大野川に残る逆水門

汽水湖時代の情報を
ぜひ当研究所までお寄せください。
電話 076-288-5803
ﾒｰﾙ　info@kahokugata.sakura.ne.jp

河北潟と日本海をつなぐ一本の川「大野川」。この大野川の中ほどにかかる新川橋（金沢市粟崎町）のところに、「逆水門」と呼ばれた大野川新川橋防潮水門の跡がいまも残っています。昭和13年から昭和46年頃まで、大野川を逆流する海水を防いでいました。

この水門は潮汐の力で自動的に開閉する木製の水門だったようです。潮が満ちて大野川の水が逆流すると、水門が閉じるため、船が行き来できなくなります。そのため、河北潟沿岸土地改良区から委嘱された2名が、舟が通るたびに人力で水門を開けていたそうです。毎日、120～130艘の舟が往復し、水圧のかかる水門を人力で開け、危険を伴う命がけの仕事であったことが当時の新聞記事に残されていました。その記事は河北潟沿岸土地改良区より提供いただいたものですが、以下のような記述があります。「数年前まではワイヤを鉄製ハンドルで巻き上げて水門を開閉していたため、水位が高いときは水圧に負けてハンドルが猛烈な勢いで逆回転。水中にはじき飛ばされて橋げたに必死にしがみつき、一命を取り止めたことが何度もあったという。」「河北潟沿岸の農地は昔から塩害のため数年ごとに大凶作に見舞われ、泣かされてきた。内灘の漁民の反対を押し切って取り付けたこの水門だけはなんとしてもわれわれ農民が守り抜かなければ。」、この記載にあるように逆水門が設置された背景には、沿岸農地の塩害があったようです。汽水湖だった頃の河北潟は、ウナギやヤマトシジミがたくさん生息していましたが、海水の流入が抑えられたときに河北潟の生きものに影響があったのか、塩分濃度や水位の変化など、詳しいことはわかりません。情報を集めているところで、当時のことをご存知の方は、ぜひ情報をお寄せください。（文：川原奈苗）

（2019年9月撮影）

新しいコミュニティ
はじめての田んぼ作業

七豊米はコミュニティが作ったお米。昨年の夏、このコミュニティは地元だけではなく、世界のコミュニティになりました。金沢で行われる「プリンストン・イン・石川」という短期留学プログラムから3人の学生たちが訪れ、七豊米の田んぼで除草作業をしたり、当研究所のスタッフに英会話を教えてくれたりしました。

このプログラムはプリンストン大学が主催ですが、40人余の留学生はアメリカ各地の大学から来ていて、日本語集中講座を受けながら、ホストファミリーと生活したり、石川県や日本の文化を学んだりします。昨年は、私の妹も日本語を学ぶために、このプログラムに参加しました。　私自身は、三年前に来日して、現在河北潟湖沼研究所でアルバイトをしています。私たち姉妹のルーツは河北郡ですが、生まれも育ちもアメリカです。妹は、日本語のクラスで、地域ボランティアの課題を出された時、研究所で何かできないかと聞いてきました。そうして、この留学生のボランティア活動が実現しました。

6月から7月にかけて、妹のジュリア・ウェルドン（オバーリン大学）のほか、ジル・マンコフさん（ウェズリアン大学）、とトラヴィス・ルーカスさん（コーネル大学）が計3回、ボランティアに訪れました。最初は田んぼの草取り。日本に来る前、田んぼを見たことがなかった学生たちは、田んぼ用の長靴が「カッコイイ」と言いながら、はじめて水田に入って、作業を楽しみました。日本の田舎暮らしが体感できて、とても良かったと言う声が聞かれました。いろいろなボランティア活動の中でも、田んぼが特に評判がよく、2回目の草取りには、さらにもう一人の学生が参加しました。

最後のボランティア体験は英語を教えることでした。3人の学生は3人のスタッフと1対1でそれぞれ10分程英語で話しました。この体験はスタッフ側も学生側もとても勉強になったそうです。スタッフ側からは生の英語を聞き取るのは難しかったけれど、新しい言葉を習い、留学生と交流出来てよかった、という感想が出ました。学生にとっては、簡単な英語を使うのが意外と難しかったそうです。「私の日本語の先生はいつも簡単な日本語を話してくれて、感心します。」とコメントしていました。

三人の留学生たちはもう帰国してしまいましたが、この夏の体験をきっかけに、もっと交流が深まることを願っています。プリンストンの日本語プログラムは、毎夏金沢で行われるので、今年も留学生が田んぼを手伝いに来て、七豊米作りが世界に広がっていったらいいなと思います。

（文：吉田香蓮）

河北潟湖面利用協議会

6月10日にこなん水辺公園において、第11回河北潟湖面利用協議会が開催されました。今回は18名が参加して、河北潟湖面利用ルールの普及状況や河北潟の現状について情報交換するとともに、ルール運用についての課題について話し合いました。

ルールは多くの人に定着してきたことが確認されましたが、県外から来られた方や団体に属してない方たちにはルールが知られていないことが課題としてあげられました。また、最近、野鳥を撮影するカメラマンが増え、野鳥の繁殖にも影響を与えかねない状況となっており、啓発活動に取り組む必要があるとの認識で一致しました。

湖南公民館観察会inこなん水辺公園

青空がひろがる6月17日、地元の湖南公民館の皆さんがこなん水辺公園を訪れました。こなん水辺公園は近隣集落から離れた場所にあるため、地元でも知らない方も少なくありません。今回参加された皆さんの中には園内を見て回るのは初めてという方が多くみられました。この日は、ヌカエビやアメリカザリガニなどが観察されましたが、最近のポンプの故障が影響したようで、生きものは少ない状況でした。アメリカザリガニや魚や植物や河北潟のことなど、色々な質問をいただきました。毎週土曜・日曜日の10時から14時は、メンバーが交替で解説員を担当しており、園内の水辺をご案内します。

「JAL スカラシッププログラム」フィールドワークの受け入れ

7月5日、オーストラリアやインド、中国、ミャンマーや台湾などアジア、オセアニア地域で日本語を学んでいる学生さんが、日本の学生さんと共に河北潟湖沼研究所事務所に来てくださいました。「JAL スカラシッププログラム」での田んぼの環境保全をテーマにしたフィールドワークの一環として来所され、研究所が行っている田んぼの環境保全活動、七豊米や生きもの元気米等について、お話させていただきました。

PROJECT WISE

湿地の賢明な利用を「社会的企業」活動として展開する活動に対して、香港上海銀行（HSBC）の寄付プロジェクトがラムサール・ネットワーク日本と日本国際湿地保全連合を通しておこなわれており、「たくさんの食べる力で生きもの元気米をひろげよう」の取り組みをご支援いただきました。本プロジェクトをすすめるにあたって、あらためてスタッフで話し合い、「生きもの元気米」の達成したい目的や、毎月の活動での目標値を掲げ、活動をすすめることができました。これにより活動をひろげることができました。

メルマガ購読ご登録ください

活動案内や生きもの元気米などの情報を、月に数回メルマガにて発信しています。ぜひご登録をお願いします。ご登録はこちら→

編集後記

色々な応援により、七豊米の活動も7年間継続されました。スタッフ側もだいぶ慣れて、短い距離の方向に田植えするなど工夫できました。みんなよく笑って、幼い子供たちが元気いっぱいで良かったです。(N)

かほくがた Vol.24-2
NPO法人 河北潟湖沼研究所通信
平成31年3月31日発行
〒929-0342 石川県河北郡津幡町北中条ナ9-9
電話 076-288-5803 FAX 076-255-6941
ホームページ http://kahokugata.sakura.ne.jp
E-mail info@kahokugata.sakura.ne.jp